

故 八田 恭昌教授略歴・著作目録

## 追悼 八田恭昌先生

一九九二年十一月十八日。訃報は、昼休みを利用して来年度の科目担当を協議している新聞学専攻の会議に《突然》届いた。八田先生が三日前に入院されたこともあって「来年度は少し負担を軽くしてあげよう」と相談している矢先で、「まさか！」の思いが走った。

ある女子学生は、本来なら八田先生に提出すべき「卒業論文」の最後に「バラバラの人が心の垣根を取り払って同じ地平に立てるんだということ、そして笑いあえるんだということを教えてくれたのは、故八田恭昌先生であった」と書いてある。十年ほど前に心臓を患って入院された時から先生の「看護婦さん」への憧れが始まったように記憶しているが、先生は、虚飾を取り払った純真さが人間には大切であり、「笑い」と「ユーモア」こそが人生の最高基準だと学生に繰り返し説かれていた。同じ八田ゼミの男子学生は「八田恭昌氏は、脱体制に『笑い』の意味があるといい、それを実践した。（中略）看護婦さんごっこ時の八田恭昌氏の目つきや動作があまりにも静寂として信念に満ちたもので、私には最初は不気味に思えたものだが、今になって思うと、あれは何かに対する『叛骨』の精神であったのではないか」と卒業論文に書いている。「私は新聞学と関係ない」と口癖のように言われていたが、先生は教育者としてきつちり「ジャーナリズムの精神」を学生に注入されていたことがうかがえる。

八田先生のお仕事の中心テーマは、二〇世紀前半のドイツ思想だが、既成の価値観を振りほどき、学界の流れに束縛されず、世上の常識にも拘泥せず、上下左右を問わず誰とも同じ地平を共有しながら、自由なスタンスで分析を展開されている。たとえば『ヒトラーを生んだ国』（新潮選書・一九八六年）第二章「古典的ユマニスト——社交と柔軟性の哲学」にその思索基盤の典型例をみることができる。同章1「ルネサンスの笑い」の小見出しは、「笑っていけないものはない」「力みのない複眼の視座」「非（ノン）の立場」「ラブレリーのいちびりズム」「道化という外交官」等々である。「商業都市大阪の『いちびり』」にも、この童心の道化性がある。この『いちびり』も、武士階級のような窮屈な対面にとらわれることなく自然の本音で生き、自分の弱点をさらけ出し、自分をボケと見なすセルフ・アイロニーをもつことによって、ルネサンス期の道化師と同じく、商談を取り結ぶ際の潤滑油の機能を果たしている」（同書・三六頁）。

八田先生は、こうした大阪商人の行動パターンをこよなく愛し、最大限他人に気を使いつつも「正論」をズバリといひ、細やかな神経でいちびり、道化師の笑いを身をもって実践されていた。その言動に潜む先生の《真実》をしっかりと見つめ直したい。  
ご冥福をお祈りします。

北村 日出夫



故 八 田 恭 昌 教 授

# 故 八田恭昌（良太郎）教授略歴

- 一九二六（大正一五年）一月二日 神戸市に生まれる。  
一九三九（昭和一四年）四月 静岡県立沼津中学校入学  
一九四五（二〇）三月 静岡県立沼津中学校卒業  
一九四六（二一）四月 同志社大学予科入学  
一九五一（二六）三月 同志社大学文学部社会科学卒業  
一九五一（二六）四月 同志社大学大学院文学研究科社会福祉学専攻入学  
一九五三（二八）三月 同志社大学大学院文学研究科社会福祉学専攻修了  
一九五三（二八）五月 同志社大学文学部社会科学助手  
一九六二（三七）四月 同志社大学文学部社会科学専任講師  
一九六五（四〇）四月 同志社大学文学部社会科学助教授  
一九六八（四三）四月 同志社大学文学部社会科学教授  
一九七三（四八）四月 同志社大学大学院文学研究科新聞学専攻教授  
一九九二（平成 四年）一月一八日 逝去

## 主要著作・論文・翻訳・その他

### 著書

- 一九六六（昭和四一年）五月 『西洋の没落』（桃源社）  
一九八一（五六）二月 『ヴァイマルの反逆者たち』（世思思想社）  
一九八六（六一） 『ヒトラーを生んだ国』新潮選書（新潮社）

論文

一九五四(昭和二九年)	九月
一九五六( )	三一) 一月
一九五八( )	三三) 三月
一九六〇( )	三五) 二月
一九六一( )	三六) 六月
一九六三( )	三八) 三月
一九六三( )	三八) 一月
一九六五( )	四〇) 九月
一九七二( )	四七) 七月
一九七三( )	四八) 七月
一九七四( )	四九) 三月
一九七七( )	五二) 三月
一九七八( )	五三) 三月
一九七八( )	五三) 二月
一九七九( )	五四) 一月
一九八〇( )	五五) 三月
一九八七( )	六二) 一〇月
一九八八( )	六三) 四月

- 「文化の概念—C・クラックホーンを中心として—」(人文学、一六号)
- 「文化の総合的研究—特に様相的把握に関して—」(人文学、二八号)
- 「オスワルト・シュペングラー(1)」(人文学、三四号)
- 「オスワルト・シュペングラー(2)」(人文学、四六号)
- 「シュペングラーとテンニエス」(人文学、五三号)
- 「ドイツにおける初期ロマン派のイデオロギー(1)—後進国のイデオロギー—」(人文学、六六号)
- 「ドイツにおける初期ロマン派のイデオロギー(2)—現実疎外の世界観的論理—」(人文学、六八号)
- 「O・シュペングラーの先駆者たち」(人文学、八三号)
- 「アイサー・ケストラーの入党と転向について—両大戦間におけるインテリと政治—」(評論・社会科学、第四号)
- 「オスワルト・シュペングラーと政治(1)—両大戦下におけるインテリと政治—」(評論・社会科学、第六号)
- 「二〇世紀におけるドイツの右翼インテリと政治—メライ・パン・デン・ブルックを中心にして—」(社会科学、五卷、二・三号)
- 「ヴァイマル時代の左翼的右翼人(1)」(評論・社会科学、第一二号)
- 「ヴァイマル時代の左翼的右翼人(2)」(評論・社会科学、第一三号)
- 「ヴァイマル時代の左翼的右翼人(3)」(評論・社会科学、第一四号)
- 「ヴァイマル時代の左翼的右翼人(4)」(評論・社会科学、第一六号)
- 「ヴァイマル時代の左翼的右翼人(5)」(評論・社会科学、第一七号)
- 「特集 アドルフ・ヒトラーの謎—突撃隊(S・A) 肅清—」(歴史読本、特別増刊)
- 「特集 世界が恋する一九二〇年代—踊る「ベルリン」—」(芸術新潮)

翻訳

- 一九六〇(昭和三五年) 一〇月  
 『運命・歴史・政治』(理想社)
- ウオルター・ラカー著(脇圭平・初宿正典共訳) 『ワイマル文化を生きた人びと』  
 (ミネルヴァ書房)
- 一九八〇( 五五年) 九月  
 ウルリヒ・リンゼ著(望田幸男・奥田隆男共訳) 『ワイマル共和国の予言者たち―ヒトラーへの伏流』(ミネルヴァ書房)
- 一九八九( 六四) 一二月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(1)』(金丸輝雄共訳) (同志社法学、第七七号)
- 一九六三( 三八) 二月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(2)』(同、第七九号)
- 一九六三( 三八) 三月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(3)』(同、第八〇号)
- 一九六三( 三八) 六月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(4)』(同、第八一号)
- 一九六三( 三八) 九月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(5)』(同、第八二号)
- 一九六三( 三八) 一〇月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(6)』(同、第八三号)
- 一九六四( 三九) 一月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(7)』(同、第八四号)
- 一九六四( 三九) 二月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(8)』(同、第八五号)
- 一九六四( 三九) 三月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(9)』(同、第八六号)
- 一九六四( 三九) 四月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(10)』(同、第八七号)
- 一九六四( 三九) 五月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(11)』(同、第八八号)
- 一九六四( 三九) 七月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(12)』(同、第八九号)
- 一九六四( 三九) 九月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(13)』(同、第九〇号)
- 一九六五( 四〇) 一月  
 H・メイスン著『トインビーの世界政治観(14)』(同、第九一号)
- 一九六五( 四〇) 三月

(付記) 収録されたものの他に遺漏したものもあると思われるので、お気づきの節は社会学科研究室、山口功二までお知らせ下さい。